

論文内容の要旨

近年、過疎高齢化や大規模災害などの社会変容を背景に様々な地域の歴史資料（民間所在資料）が散逸の危機に陥っている。地域の歴史研究に関わる歴史学の分野では、地域資料を地域文化資源と捉え、記録し、継承することが議論となっている。文化資源の継承危機は、平成期以降、守り手不在や専門知識の不足、文化行政の支援の限界などで歴史学の知識が社会に実装されていないことに起因している。こうした社会課題に対応するため、これまで歴史像提供が主体だった歴史学の「研究者」も地域に入り、「市民」と協働して知識を伝え、文化資源を残すべきという「市民科学」（シチズンサイエンス）の必要性が提起され、様々な実践活動が全国で行われている。インターネット等で学術研究情報が広く公開されるようになり、市民が研究やプロジェクトに参加すること容易になっており、文化資源の継承においても市民科学の普及は期待される方法論である。本論文では、この市民科学による文化資源継承の実践活動とその方法論を論じている。

市民科学で文化資源の記録・継承を進める際の研究課題として、【1】記録した文化資源の可視化が進んでいない、【2】文化資源の記録・継承の担い手の役割分担が明らかにされてない、【3】継承につながる市民参加の方法論が確立されていない—という3つの研究課題が上げられる。記録継承する文化資源を増やしていくには、実践活動を分析して市民科学のノウハウや課題を明らかにして、活動が各地域で行えるようにする必要がある。

そこで筆者は、市民科学の実践で「インタープリター」「在野のアーキビスト」などと呼ばれ、記録・継承活動に大きな役割を果たす担い手とされてきた、専門的知識を有する市民を市民研究者と位置づけ、その役割に注目した。さらに、市民参加を促し、市民科学の促進に効果的とされるデジタルツールに着目した。すなわち、上記3つの研究課題を解決するため、デジタルツールによる文化資源の可視化と、市民と研究者をつなぐ市民研究者の役割、その育成に焦点を当てて実践例を検証し、「地域文化資源の継承実現に有効な市民科学の方法論を提示すること」を研究目的とした。

実践例としては、次世代への継承が課題となっている「小地名」「屋号」「棚田」「村落景観」「近現代資料」「学校資料」「戦争体験」「災害資料」「地域祭礼」という9種類の文化資源の記録に取り組む高知県内の11の市民団体の実践活動を分析対象とした。これまでの市民科学の先行例は、行政や大学の支援・連携といった活動資金や専門人材が充実した環境で進められてきたが、高知県のように専門人材が少なく、大学や行政の支援が大きく期待できない地域での市民団体による模索的な実践からは、市民科学に様々な主体が取り組むヒントがあると考え、対象を選んだ。また、11団体には全て筆者が活動に主体的に関わっており、担い手の役割分担など活動実態の把握が容易である。

【市民研究者】の役割の分析では、理系の実践例から市民科学の研究で提起された市民の関与度を検証するモデルを応用して、活動を「テーマの設定」「データの記録」「成果の公表」「継承活動」など10の段階に分けて担い手の役割分担を図表化して明示する手法を用いた。ここでは、担い手を「市民」「研究者」の大分類と、【市民】（専門的知識を持たない市民）【市民研究者】（専門的知識を持つ市民）等の小分類に分けて、各段階の活動への担い手の関与度を質的に評価した。また、【市民研究者】の育成の分析では、「市民」が【市民研究者】として記録・継承に深く関わってもらうために「記録」「掘り起こし」「普及」という三段階で活動を進めるのが効果的とする仮説（地域文化資源継承の三段階プロセス）を用いて、11人の【市民研究者】の活動への関わり方を整理して分析した。文化資源の可視化の分析では、実践例で記録された成果の公表やデータ化に担い手がどのように関わったかを整理・検証した。

その結果、文化資源の可視化の分析では、11事例でアナログ・デジタルの多様な歴史情報の可視化が実現していた。可視化やアーカイブの構築、位置情報を意識した記録を行うことで、成果のデジタル化が可能になっていた。また、Googleのサービスなどオープンリソースを利用することで、HPや地理情報システム（GIS）による可視化が低コスト、省力化で実現できていた。この際、【研究者】が可視化の編集者として重要な役割を果たしていた。また、市民参加でデジタル地図を作成していく「参加型GIS」の取り組みも行われ、町歩き地図、調査支援ツール、地域資料の被災リスクマッ

ブなどの可視化が可能になり、歴史継承や地域調べ、防災といった地域課題に対応した活用まで発展していた。ここでは、オープンリソースを使ったプラットフォーム「高知工科大学フィールドデータベース」を開発・運用したことで、市民が記録した50件のデータをアーカイブ、GISで公開することができた。基礎データの作成や地図からの位置情報の抽出など「市民」と「研究者」が役割分担することで、多くの記録を可視化できていた。記録の公開の範囲についても「市民」と「研究者」が意見を共有化することで、スムーズな公開が実現できていた。デジタルツールの活用は、活動の途中段階で、担い手が記録の実施状況や成果を共有できるツールとなり、市民参加を促すきっかけになっていた。

【市民研究者】の役割の分析では、文化資源の記録において専門性と継続性を持つ【市民研究者】の関わりの重要性が明らかになった。実践活動を10段階に分けて各段階で担い手が果たした役割を比較検証すると、記録の専門性が低く「市民」の記憶に依存する「屋号」「小地名」の事例では、「市民」がほぼ全ての活動段階に参加しており、「研究者」不在でもほぼ実施可能なことが分かった。一方、記録に高い専門性が求められる「村落景観」「棚田」「災害資料」の事例では、「市民」がデータ整理以外の活動段階にほとんど参加できず、【市民研究者】の不在も相まって「研究者」主体の活動になっていた。記録が長期間・広範で専門性も求められる「戦争体験」「近現代資料」、長期間・重点的な記録が必要な「学校資料」「地域祭礼」では、【市民研究者】が継続して参加したことで、10段階ほぼ全てに「市民」が関わり「研究者」との協働的な活動が実現していた。このことから、文化資源の記録において専門性と継続性が重要で、その2つを持つ市民研究者の関与が継承活動への発展につながる要素であることが確認された。

また、「市民」と「研究者」の関わり方には、【市民研究者】と【研究者】が地盤を整えて【市民】を巻き込んでいく（仲間を増やしていく）途中参加型と、参加プロセスの工夫（所蔵者への事前聞き取り、ワークショップ）で、【市民】と【市民研究者】、【研究者】がテーマ設定から関わる初動参加型の2つのパターンがあり、ここでも【市民研究者】が大きな役割を果たしていた。

【市民研究者】の育成の分析では、「小地名」「近現代資料」「戦争体験」「地域祭礼」の6事例11人の【市民研究者】が「記録」→「掘り起こし」→「普及」という仮説のプロセスで活動に関わっていたことが明らかになった。特に「普及」（継承活動等）のプロセスで【市民研究者】が中心的な役割を果たしており、「記録」から「普及」への発展に【市民研究者】の参加が重要であることが分かった。また、11人の【市民研究者】の活動への関わり方を検証すると、（1）【研究者】との記録の中で技術・知識を身につけ、記録が可視化されたことで文化資源の価値に気付く、（2）技術・知識の習得と文化資源の価値を説明ができることになったことで「成果の公表」「継承活動」など参加できる活動段階が増えた、（3）【研究者】にやってもらうのではなく、地域の記録者として活動するという意識が強まり、自ら記録を行って成果を公表する自発的活動を始めた—という共通する行動パターンがあることが分かった。

「記録」「掘り起こし」「普及」プロセスが機能するには、文化資源記録に関心を持つ【市民研究者】と【研究者】が地域で出会うことが前提条件となっており、活動を「研究者」が記録継承の知識普及・生涯学習（歴史学の社会実装）の場と位置づけ、「市民」と一緒に記録することで、継承の担い手となるという「在野のアーキビスト論」でも提起されている「育成」のプロセスが重要であることが分かった。【市民研究者】のスキルアップや【市民】から【市民研究者】へのステップアップが、「成果公表」「継承活動」の動機付けになっており、「達成感」「充実感」「自己成長感」といった内発的動機づけが起きていた可能性がある。具体的には、講座に資料代を払って行って聞くよりも、実際に資料に触れて自ら聞くことの効果が大きく、「継承の知識がない、座学だけでない人材育成」という地域のニーズと歴史学の社会実装の活動が一致したことも大きかったのではないかと推測した。

また、実践例から「小地名」の記録の方法を基に「屋号」「村落景観」「棚田」「災害資料」に応用された活動モデルを「四万十モデル」、近現代資料」の記録の方法を基に「学校資料」「中近世資料」に応用された活動モデルを「高知資料ネットモデル」として図式化して整理した。これらの2つのモデルは、県内の市民団体の活動に応用されて広がっており、市民科学を行う上で有効な活動モデルとして提起した。

本研究で示した実践活動は、文化資源の継承課題への対応を目的としたもので、市民科学によって膨大な記録を実現した。その結果、市民団体が新たな記録主体になり、専門人材に限られた地域では有効な方法となっていた。文化資源の可視化は、市民科学によって低コスト・省力化で実現でき、継承の力になっていたことを示せた。これは、収蔵庫で守られた資源の可視化を解く「歴史情報学」とは異なる地域発の新しい視点である。また、「市民」が「記録」に参加し、資源の価値に気付く意識の「掘り起こし」が、継承や活用といった「普及」に至る重要なプロセスであることも示

した。この過程が、地域で切望されている継承の知識の普及（歴史学の社会実装）につながり、「在野のアーキビスト」などと呼ばれる地域文化資源の継承を担う【市民研究者】を育てる有用な方法であることを提唱した。